
NecessaryCorkscrew

必然的な螺旋階段

ひつぢ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

NecessaryCorkscrew

必然的な螺旋階段

【NZコード】

N9646D

【作者名】

ひつぢ

【あらすじ】

死神の少女と半人半妖ダンピールの少年や聖獣たち。彼らが出会ったことは必然。神々の意志もまた必然なのか

* Prologue * (前書き)

この小説に興味を持つてください、ありがとうございます。
はじめの方は普通なのに、後々ぐるくなりそつで恐いな…。
でも、とりあえず読んでください！！！
感想・指摘等いただけたら嬉しいです！！！！
いや、嫌だつたらいいんですよ？
ただ私が寂しくて死んじやうだけですから。。。
兎かよッ！（一人ボケツツコリ・・・）

* Prologue *

「えっと、あなたの死んだ日は4月27日ですから……ああ、今からあなたには神と人との中立の者、死神になつてもらいますね」

「え、あ、…………え？」

・

そこには、神聖な光がすべてを包む、無限の空間。

その一角に、濃い闇色の短髪に、フードの付いた漆黒のコートを羽織る少女がいた。

少女の一一度目の記憶の始まりはここ 神の住まつ町。通称ゴッタウン

通り名は『悪魔に近し神』。

彼女の忠実な性格が周囲には冷酷さに見えるらしい。

本当の名は【刹離 セシリ】といった。

余談だが、状況を把握できていない状態で、突然語呴合せで彼女の職を決めた審判の神の顔は、
彼女の記憶に深く刻まれている。

* Prologue * (後書き)

登場人物

名前：刹離 セツリ

性別：女

髪：黒の短髪

瞳：深い紺色

服装：黒が基調ならなんでもよし

性格：冷静で忠実

身長：164センチ

体重：48キログラム

足：23.5センチ

武器：基本は死神の鎌デスサイズ

特徴：古めかしい喋り方。据わった目をしている。

他の死神より遙かに強い力を隠し持っている。

一言：いつか審判の神に闇討をしようと思うのだが、貴方も一緒にどうだ？

あ、我へのファンレターはいつでも待っているぞ!!!

第1話 全てが終わり、始まった日

「 リ、刹離！！！」

「ん？あ、すまん。で、なんだ？」

雷撃の神であり、刹離の友人であるジェスが肺が空になるほど大きなため息をつく。

死神の基本の服装である漆黒のコートとは対照的に、ジェスの衣装には多くの神岩がついている。

神岩とは、神本来の力を引き出し、融合の時に、よりシンクロ率を上げるものを目指す。

ジェスの例としては、審判の神と融合し【審判の雷 ジャステイス】となることが可能だ。

神岩は、例外を除いて、ほとんどのモノが美しく光り輝いている。雷撃を髪と瞳の色に宿し、性格の明るいジェスは、神岩によってさらに明るい印象がある。

「 も～、聞いてよねっ！！今日の仕事は四人までよ～～ちゃんと稼いで、一人で仕事の内容把握しなさいよね～～！」

刹離のゆつたりとした返答が気に食わなかつたのか、頬を膨らませるジェス。

そんなジェスの反応を全く気にするそぶりもない刹離。

「 承知している。強い守護獣は式にする。だから、タウンで待つていていいぞ」

守護獣とは、生まれながらに多少なりとも魔力を秘めている人間についている、いわば守護霊のようなもの。

それが、主人の魔力に応じてチカラを持ち、獣化したものを守護獣という。

一般的な守護獣は、主人と関わることはなく、ただ守るという本能を全うする獣である。

「 まったくもう！魔力の強い人間に式に下されても知らないんだか

ら……」

ジエスの姿が徐々にノイズ感を帯び、搔き消える。

「どうせ映像だけなのに、心配症というのも困りものだな……」

刹離が顎に手を添えてうんと唸つた。

夜の風が刹離の短い黒髪を不気味に撫でる。

「さて、今日のノルマは四人か……」

人界に降り、一際高い高層ビルのてっぺんから下界を見下ろす刹離。

ふと夜風が強くなつた。

月明かりに照らされた刹離の影の横に、風と共にフッと小柄な影がひとつ顕現した。

時間がない、夜が明ける前に早く狩るぞ

幼い少年のような声のそれは、大きめな猫のような体だが、耳は長く、狼のような尾をしている。

背中には漆黒の翼があり、瞳は深い夜色をしている。名を【刹羅セツラ】といつ。刹羅は、人間につく守護獣とは違い、刹離に仕える式である。

式は、チカラのあるものであれば、主人と言葉を交わしたり、融合することができる。

刹羅の場合は、融合するには人型に変化しなければならないため、滅多にすることはないが、式として呼ばれなくとも自分の意志で顕現することが可能なのだ。ここまでいけば、かなりランクの高い式であることは確かだ。

「うむ。では、あそこからこいつか。」

刹離と刹羅は高く飛び、人影のない路地に向かっていく。

月の前にあつた二つの影が羽音とともに消える瞬間、刹離のコートが翻り、鋭く光る刃物の切先が月光に反射した。

「一人目・・・」

刹離は死神の武器、デスサイズに寄りかかり、刹羅と守護獣の戦闘を眺めていた。

はつきりいつて勝負になつていない。刹羅が圧倒的に強すぎるのだ。「なんだか弱いからいらぬといわれそつだな・・・」

刹離は戦闘を見て何気なく刹羅の次の言葉を予想した。

弱いな。魔力が弱すぎる。これはいらぬ

刹羅は吐き捨てるように言い、高く跳躍する。

今にも消滅しそうなほど守護獣に向けて、刹羅の羽が一本放たれた。

見事、それは守護獣の急所である額に命中した。

刹離よ。早急に人間を狩れ。次へ行く

「承知。（予想通りの言葉が来るとは・・・）」

何故か上から物を言う刹羅を横目に、刹離はデスサイズを両手で構えた。

呼吸を整え、獲物を見据える。

「では、人間。魂、頂戴す・・・るッ！」

語尾のところで思いつきりデスサイズを振り下ろす。

「う・・・・・・」

人間は、小さなうめき声を漏らしたが、それきり動かなくなつた。人間たちの間では、死神に狩られた者の死因を「心臓麻痺」と呼んでいるらしい。

デスサイズは、人間の身体を斬らずに魂だけを斬るものなのだ。

その種類は実に多種多様で、刹離のものは全体的に細く、一見とてつもなく弱そうにみえる。

しかし、実際は刹離以上の神通力と魔力を合わせ持つ死神など、いるかいかわからない。

刹離、次はこいつを狩つておけ。守護獣は消滅させた

「むむ、刹羅、ペースが早すぎるぞ」

先ほど斬つた人間の魂を捕まえ、意識を集中させ、ふつと息を吹き掛ける。

すると、魂に鋼の鎖が一瞬にして巻きつけられ、するすると上へ上つて行つた。

こうすることで、魂を上に送り、稼いだことになるのだ。

この時に魂を捕まえ忘れる、魂の匂いを嗅ぎつけて、雑鬼や悪魔たちが寄つてしまつ。

雑鬼や悪魔たちに喰われた魂は、それらの【負】の力に影響され、それもまた雑鬼か悪魔に変わつてしまつ。

そういったところで、死神は人間の命を拾い集めて天界と人界と冥府の均衡を保つてしているのだ。

これが、死神が『神と人との中立の者』と呼ばれる所以なのである。

斬ツ！

刹離は再び人間の魂を狩り、同じく息を吹きかけた。

二人目、狩り終了

第1話 全てが終わり、始まつた日（後書き）

登場人（？）物

名前：刹羅	セツラ	性別：
毛：黒褐色		瞳：夜色
服装：獣ですから		性格：冷静且つ冷酷
身長：46センチ		体重：25キログラム
足：7センチ		武器：翼、爪、牙、等々

特徴：刹離と似た喋り方。

いつも刹離の傍らにいるが、真の姿は不明。

一言：我は刹離とともににあるのみ。容姿のことは何も言つなよ。

刹離がこの方が可愛いと言つて笑つてくれたからこうしてい
るだけだ。

第2話 全てが終わり、始まつた日2

「二人目も弱かつたな。次はどれにしようか……徒人には刹離と刹羅の姿は見えないので、上空からどれを殺すか選んでみている。

「・・・ん?」

どうした

「あれは強くないか?」

刹離の指さす方向を見ると、先ほどまでいた路地に沿つたこれまたさらに人影のない大きな公園に、淡く輝く人影があった。魔力のあるものは、神々の瞳には必ず輝いて見える。魔力が強いものほど、それは美しい輝きとなるのだ。

今公園にいる人間はかなりの大物だ。

あの輝きは、神父か人間に化けている聖獣でなければありえない。今回の場合、後者ではないことは絶対だ。

刹羅は光り輝くその姿を確かめると、不適な笑みを浮かべた。

ほう。少しほねがありそうだな

と呴き、人間の横につく守護獣の方へと降下していった。

レジア様、珍しい者がいますよ。死神・・・いかがいたしますか?

「ん~？強くてかわいかつたら式にする~」

レジアと呼ばれた青年は、調子よく答えた。

肩より少し長めの銀色の髪に、動きやすさ重視の白を基調とした服を身にまといている。

整った綺麗な人間らしい容姿とは対照的に、瞳には獸のよつた鋭い光を宿していた。

・・・レジア様・・・・・

青年の横にいる影が溜息を深く吐いた。

バサツ

刹羅の翼のはためく音が、夜の静まりかえった公園に響いた。

ほう。主人と言葉を交わすか。守護獸ではないな？悪魔か、否、

聖獸か？

私はレジア様に仕える聖獸、ヘレス。龍鳳族の聖獸です
ヘレスと名乗った聖獸の姿は、とても美しいものだった。
龍の胴に鳳凰の翼。瞳は深い海を映した蒼緑をしている。

「刹羅、こいつら、普通ではないぞ。あの人の魔力に獸の禍々しさが混ざりておる」

しばらく相手の魔力を探っていた刹離がその場に舞い降りた。

少し前に出ていた刹羅が刹離の横につく。

死神のお前が言つた、刹離。神通力はお前が上だ。奴に勝機は

刹羅は唐突に言葉をきつた。

刹離と刹羅の目の前でレジアと呼ばれた青年が魔法を成していたのだ。

『我が名レジアの名の下、集え我が式。召喚惡魔【レウイー】今こそ我に力を分け与えよ』

レジアが空に魔方陣を描き、息をかけた。

その間、刹羅はただただ驚愕していた。

今まで魔力のある人間は何人も狩ってきた。その大半は我々の姿すら見えていなかつた。

視えたとしても、抵抗することすらできずに狩られていつた。

しかし、こいつはダンピールの人間型。

ダンピールはそうそう生まれてはこないが、珍しい分靈力が強い。だから魔法を使うことなど不思議ではない。

その魔法が問題だ。

召喚魔法というだけでもたちが悪いのに。

さらに、召喚悪魔レウイーは、上級の者しか契約をかわせないAランクの悪魔だ。

召喚悪魔レウイーがAランクとなつた理由が少々厄介だ。

刹離はまだレウイーと対峙したことがない。だからきっとそれを知らないだろう。

これは・・・・・勝負が見えたな

ひゅんつ

思考を巡らせていた刹羅を、耳元で唸つた風が現実へ引き戻した。

刹羅といいましたか？あなたの相手は私がさせてもらいます
はつ、下衆が

刹羅とヘレスの戦いの火ぶたが切つて落とされた。

レジアの周りに夜のやみより深い闇が現れ、その中から悪魔が現れた。

あつしをお呼びですかい？ご主人

「おう、あの死神の子、式にしちゃってくれ
あいよ

刹羅とヘレスの横を一陣の風がすり抜けた。

直後、甲高い金属音が響き渡る。デスサイズとレウイーの魔刀がぶつかったのだ。

レウイーはぶつかった反動で後ろにはねる。

一足早く態勢を立て直した刹離が強く踏み込み、斬りかかる。そのままレウイーに攻撃させる隙を与えない。

「おおっ、俺の式の中でも結構戦闘力の高いレウイーに勝るか。
これは欲しいなあ～」

戦闘に全く参加しないレジアが騒ぐ。よし、とレジアは一つ頷いた。

「もうやつていいよ、レウイー」

やるつて、何をだ？

刹離が少し考える。

そんな刹離の隙をレウイーは見逃さなかつた。

召喚悪魔レウイー、特殊能力「強制契約」発動

刹那、レウイーの掌が刹離の額に当たられた。

「つ
・
・
・

咄嗟に数歩後ろに下がり、再びデスサイズを構えた

・
・はずだった。

刹離の意に反し、デスサイズが突然消え失せる。

デスサイズは刹離の意志で出現するのだ。そのデスサイズが戦う氣

満々の刹離の手から無くなつた。

「なつ・・・・デスサイズが・・・出せ・・ない・・・」

「当り前じゃん。主人の召喚した仲間に刃を向けることができるわけないでしょ」

「・・・は？」

現状が把握できず、呆けている刹離の頬を刹羅の尻尾がペチリと叩いた。

お前が奴の式に下つてしまつたということだ。召喚悪魔レウイーの能力は、強制的に相手と自分の主人の関係を主従関係にさせるもの。刹離の式である我も結果的に奴の式、といふことになる

「そーゆーこと」

死神という式を入れて上機嫌のレジアが笑顔で応えた。

ダンピールよ。死神の仕事・・・狩りを放棄した場合死神が消滅することくらいは知つていてるであろう。狩りを邪魔した者も、最高神ゼウス等によって裁かれる。それを承知の上か

刹羅の灰黒の瞳がぎらりと光つた。

抑えてはいるものの、刹羅から僅かながら殺意を感じられる。

「あ、大丈夫。俺の職業なら両立できるから。それなら俺の式になれるだろ？」

選択の余地もないのにわざと疑問形にしてくるレジア。

刹離はがっくりと首をうなだれ、その場に膝をついた。

「そんな・・・・ジエスよ、お前の言う通りになつてしまつたぞ・・・

」

真夜中の公園に刹離のため息が響いた。

「まあまあ、そんなにおちこむなつて！－これからよろしくな！」

小さくなる刹離にレジアが明るく言つ。

「俺の名はレジア。妖怪と人間との間の子だ。よろしく」

にこやかに手を差し伸べるレジアを上目づかいに刹離が見つめる。刹離は数秒その手を取るか迷つたが、一つ頭を振つて言つた。

「私の名は刹離だ。職業は死神・・・そして今から副業としてレジ

ア、お前の式も勤めよう

刹離はレジアの手を取り立ち上がった。

我々はあんなに死闘を繰り広げていたのに、当の主人がこれでは致し方あるまい

刹羅がため息交じりにヘレスへ向けて咳く。

そのようですね・・・私どもは主人の意志に従つまでですから

刹羅とヘレスはお互いに自分の主人を温かな眼差しで見守つた。

* * * * * * * * * * * * * * * * 天界の光りの届かぬ場所 * *

アレエ？ナンカ、下界デ変ナコトガ起コツ テル
【ソノヨウダナ。 - - - 、彼ノ神ハドノ
ヨウナ手ヲ打ツ テクル？

ン？ 何ヲサレテモ、コツチニハアノ【ゴルゴン
三姉妹】 モイルカラ大丈夫ナンジャナイ

【天空ノ大神、ゼウス・ウラヌス】。ソ
【アルテミス】 ヤ【死神】マデ介入サレタラ？

サスガニソノ時ハ、滅ビト再生ノ道ヲ選ブよ

様モソウデシヨ？

フツ。我ガイナイト冥府ノ世ガ極樂淨土

ニ変ワツ テシマウカラナ

神々の住まう町において唯一光の届かない場所に闇の神々が集結しつつあった。

闇の神々は話していた。

サア、祭リダ

我ラ、闇

ノ神々ノ祭リダ

叫べ、逃ゲロ、愚民ドモ

我

ラ、今ココニ集結シタリ

第2話 全てが終わり、始まった日2（後書き）

登場人物紹介

名前：レジア・ウォーヴィング

性別：男

髪：肩につくくらいの銀髪

瞳：蒼い。瞳孔が縦

向き

服装：白の動きやすさ重視

性格：軽い。何を考

えているか分らない

体重：64キログラム

身長：174センチ

武器：靈力、召喚

足：26センチ

術、剣術、等々・・・

特徴：標準の表情が笑顔。母親譲りの蒼眼がお気に入りらしい。

強い妖怪などを式に下すことと趣味とし、靈的な事件等の仕事をしている。

一言：俺の自己紹介～？ん～とね、俺へのファンレターは、二十四時間受け付け中だからね！！

それと、刹離に手エだした奴は、俺が優しく殺つてあげるからね（＾＾ヤ

人界において、人間型のダンピールの式に下った死神が一人

「納得いかぬ」

刹離がものすゞく不服そうに言つた。

「いーじゃないの！俺は魔力や靈が関係する問題を解決するのが仕事。俺が払つた魂を刹離が狩る。悪い話じやないし〜（今頃覆しようがねえし）」

レジアの言葉に副音声が重なつた気がして少し頭にきた刹離だが、一つ咳払いしてレジアをにらんだ。

「それはいい。それはいいが、何故我が人間のふりをせねばならんのだ？！」

そう言つた刹離の服といつたら、死神などではなく、思いつきり人間にしか見えない。

死神の翼も、レジアの施した術によつて徒人には見えなくなつている。

「これから依頼者のもとへ向かうんだよ～？依頼場所は大抵、憎悪や魔力が渦巻いてる。そんなとこじゃ、いくら神通力のズバ抜けた刹離でも、徒人の眼に映つちゃうからね」

ただ刹離で遊びたかつたことなどばればれなのに、もつともらしいことを言つてのけるレジア。

「諦める。我も不服だが、こいつに従うしかない

「ほ〜ら、刹羅さんもこう言つてる〜」

「何故刹羅は『さん』付けなのだ！そもそも私は・・・・・・・・・・・・来る」

刹離は唐突に言葉を切つて軽く身構える。

昼過ぎの明るい日の光が、何の前触れもなく薄暗くなつた。もつとも、その暗さは徒人が味わえば確實に気絶するため、刹離たちにしか見えない。

刹離、淀んだ強風が一か所に集結し、不気味な赤黒い靄となつた。

ザアアア・・・

赤黒い靄は、一時動きを止め、少しづつ加速しながら向かつてきた。刹離の手に「デスサイズ」が出現する。レジアは横に跳ぶと、刹離と靄を眺めた。

「さて、刹離ちゃん。お手並み拝見といこうか」
レジアの口端が僅かに上がつた。

斬ツ

赤黒い靄を中心から切り裂いた。
だが、相手はやはり靄。

再び集結し、刹離に向かつてくる。

刹離がそれを軽々とかわすと、靄はスピードを落とし、その場で全体を大きく蠢かせる。

「デスサイズで斬れず、さらに実体を持たないということは誰かしらの意志によるものか・・・ならば」

刹離は「デスサイズ」を消した。

「なつ
！」

「デスサイズが刹離の意志で出現するものだとわかつていたレジアは、

さすがに何をするのかと慌てた。

慌てるレジアを気にした様子もなく、刹離は高く飛んだ。

「我は神と人との中立の者、死神。真の名【刹離】　　ニンフの意志の精靈【フェリア】よ。我との契約の下、我に応え　　」

刹離が呪文を唱え終えると同時に、淡い緑色の光をまとった少女がフツと現れた。

久し振りい、刹離

栗色の長髪をなびかせながら、背に透き通つた羽が四枚生えている小柄な少女が刹離に気の抜けた声をかけてきた。

「久しいな、フェリア。突然ですまぬが、靄とその他もろもろ、一緒に殺してはくれないか？」

刹離の言うその他もろもろとは、靄の「負」の氣に引き寄せられて集まつた雑鬼どものことである。

フェリアはニコッと笑うと刹離に手を出してきた。

刹離もそれに応え、手を握る。

『異なるモノの融合　　B i f f e r F u s i o n　　』

刹離とフェリアが同時に呪文を唱えた瞬間、光があたりを埋め尽くし、二人の姿が消えた。

直後、二人がいた場所には、レジア達には見覚えのない一人の女性らしきの姿があった。

ニンフ＝山野・河川・樹木・洞窟などの自然の精靈。美しい少女の形容。歌と踊りを好む。

レジア達の前にいる女性。

彼女の名は、【フォーリン】。

雑鬼達の間では、【意志殺し mind kill】と恐れられている。

フォーリンの持つ鎌は、フェリアの淡い緑を映した、刹離の持つているものより細長いものだつた。

この鎌は、『消滅の意志の波動』を放つことができる。

フェリアの能力、【意志の波動】に刹離の【滅】のチカラを上乗せずするのだ。

「あと一体」

靄の【負の気】に引き寄せられた雑鬼どもを最初の一撃で仕留め、靄だけを残した。

この靄から主犯を割り出すつもりなのだ。

「さあ、行くぞ」

フォーリンが踏み出そうとした瞬間、靄が徐々に移動し始めた。それも、靄らしい風のような速さでなく、誘うかのようなゆつたりとした速さで。

レジアがひょいとフォーリンの横に来た。

「さてと、追いかけよっか。　えーっと

「フォーリンだ」

「んじや、フォーリン。行くよ

レジアがフォーリンを促し、前へ進む。

靄の行き先は依頼者の家か

「多分ね~」

刹羅の質問にレジアが答えた。

刹離様、フェリア様。念のため、そのまま融合を解かないで頂けますか？

ヘレスが問うた。

「そのつもりだ。」

フォーリンはあっさりと承諾した。

有難う御座います。では、参りましょうか

フォーリンを先頭に一同は依頼主の家へ向かった。

第3話 融合（後書き）

登場人（？）物

名前：ヘレス

髪：薄藍

服装：獣ですから
一切に思う

長さ：638センチ

足：47センチ
等々

性別：？？？

瞳：褐色

性格：大人、主人を何より大

体重：計ったことがない

武器：翼、爪、蛇体、

レジア

特徴：龍鳳族の一匹。龍と鳳凰の特徴を合わせ持つ貴重な種族。

見た目も美しく、神界でも一目おかれている。

一言：私如きが一言話していいなんて、そんな、貴重なお時間を割いて申し訳ありません。

そして、有難う御座います。これからも私たちをどうぞ宜しくお願いいたします。

第4話 依頼人

「ここか・・・」

レジアが目の前にある屋敷を見上げて咳く。

屋敷は、敷地が広く、見た目的にはかなり古いものだつた。

『あ、来た来た。ほな、中入りい』

突如全員の頭に直接響いた関西弁。

一同唖然。

『とりあえず、話は中でや。外は悪意で満ちとるさかい、気持ち悪うてかなわん』

「・・・・じゃ、とりあえず入つとくか」

数秒の間をおいてレジアが言う。

フォーリンが先頭を切つて門を開いた。

玄関の戸を開けた瞬間、フォーリンの融合が解けた。

「・・・助かつた。また頼むぞ」

任せてえ 刹離のためだものおゝ。また呼んでねえ

フェリアは指を鳴らすとフツと消えた。

刹離はフェリアの消える瞬間を最後まで見ずにさつさと前へ進んでいた。傍らにいる刹羅もまた同じだ。

レジアとヘレスは刹離たちが先に行ってしまったことに気づき、小走りで追いつく。

「なあ刹離、なんで融合解けちゃったの?」

歩きながらレジアが質問する。

「大神の前では融合した姿・偽りの姿は決して許されぬからだ」即答した刹離は奥の扉に手をかけていた。

「おい、大神つて

レジアの言葉を無視して刹離が扉を開いた。

刹離は、中にいる人影を見て、片膝をついた。刹羅は飛ぶのをやめ、地に足をつけて頭を下げる。ヘレスも刹羅に続いた。
レジアはただ一人、瞠目している。

中にいた人影、それは 三大神の一人 火を

司る戦の神 a r s マース

「よう来たなあ。ほな、もっと中入りや」

椅子に深く座り、頬杖をついて笑顔で手招きする大神。

通常大神とは人界に姿を見せることは、世界の均衡を乱すようなことがない限りは無いといってもいい。

その大神が、今、刹離たちの前で観いだ風情で手招きをしている。

「失礼いたします」

一番冷静だった刹離が軽く一礼し、奥へ進む。

それに、レジア達が続いた。

「三大神のお一人、マース様。私は、神々の眷属、死神の、名を

」

「刹離、やろ？知つとるで。神界では殺し屋や悪魔や、なんていわ
れて有名やから」

普段は自分のことえお【我】という刹離だが、さすがに大神の前では【わたくし】といつている。

そんな緊張した刹離を、大神はからかうような、楽しげな眼で見て
いる。

「マース様なんて、そない立派なもんとちやうし、ま、真の名【グ
レイス】を呼ぶことを許可したる」

大神とは思えぬ独特の空気感を持つグレイス。

刹離たちが黙つていると、いつまでもにこにこしていそうだ。

「火を司る戦の神・・・。グレイス、あんた、俺達に真の名なんて

教えていいんですか？依頼もあの靄もなたでしょう？」

真剣な面持ちで尋ねるレジアに、グレイスはフツと笑ってレジアを見据えた。

「半人半妖君、オレはある《悪魔に近し神》と呼ばれ恐れられ、仕事も完ぺきにこなしていた刹離をものの2～3分で式に下した君に興味があるんよ。もしオレに不利益な奴やつたら殺すだけやし」にこやかに恐ろしいことを言つてのけるグレイス。・・・恐ろしい・・・。

さすがのレジアも神の行つことまでは予想がつかないため、その言葉にややひるんだ。

「あ、そや」

グレイスが何かを思い出したのか、手を打つた。

「あんなあ、依頼も雑鬼もオレが放つたけどな、オレは靄なんて使つてへんで？」

「？そんなはずない。俺たちは確かに見たんだ」

レジアとグレイス、会話を聞いていた刹離までもが眉間にしわを寄せる。

そんな三人を見た刹羅が疑問解消の助け船を出してくれた。私は巧妙に隠されている惡意や殺意をあの靄から感じた。ヘレス、貴様も同じであろう？

刹羅が横目でグレイスを見ながらヘレスに問うた。

「はい。私も、僅かながら感じ取ることができました

「じゃあ、靄は誰かの惡の意志の下に放たれたってことかな？」

レジアや刹離が眉間にしわをさらに深めた。

「・・・チツ」

突然グレイスが忌々しげに舌打ちした。

その瞳は火を司る神ならではの紅い炎を映し、静かな殺意を宿していた。

「思ったより早かつたな。もう気づいたか」

「何か心当たりがあるのか？」

訝るレジアをちらと見て、先ほどまでよりさうに真剣な表情になる
グレイス。

「心当たりか……ちやうな、【確信】や」

その場にいる者たちがグレイスの次の言葉を待つた。

「ええか？この依頼の内容は、『狩り』や。ある者を狩ってほしい」

「ある者とは、いったい誰なのですか？」

刹離がグレイスの次の言葉を促した。

グレイスは一つため息をつき、ゆっくりと口を開いた。

「それは、オレと同じ戦の神。いや、血塗れた戦を好む狂神、A
r
es アレス のことや」

グレイスの言葉を聞き、それ以外の者たちは固まつた。

第4話 依頼人（後書き）

登場人物紹介

名前：マース（グレイス）

髪：猩々縄の短髪

性別：男
瞳：深紅

服装：軽装で特徴がない
が、考えていることは考えている

身長：184センチ

体重：74キロ

グラム

足：27・5センチ

武器：火炎系、

剣、五行術（火・金）

特徴：関西弁を使うために、威厳がないが、三大神と呼ばれる偉大な神。

面倒事が嫌いなので少々他人に押し付ける傾向アリ。

一言：なんや、自己紹介なんてもんやつてるん？面倒くさいことし
とるなあ～・・・。

何も言つことない言つとつたやろ。とりあえずまあ、よろしく頼むで！！

第5話 帰路

「ちょ、まつてください。神が敵？私どもに任せるとこいつとは、グレイス様には不利だということですか？」

刹離が困惑した面持ちで尋ねる。

「神が敵って、刹離も神やろ？どっちも立場は変わらんやないか。」

「それは、そうですが・・・」

言葉に詰まる刹離にグレイスはさりに続ける。

「オレは【正】の神やし【負】の気が満ちとるんは苦手やからなあ。刹離とダンピール君ならオレよかよっぽど確実に仕留められるで

多分」

「多分ってなんですか！！」

言い負かされかけていた刹離がグレイスの小さく呟いた《多分》の言葉にくらいついた。

「あ～も～、やかましいなあ・・・」

グレイスは大袈裟に耳をふさぐ仕草をしてみせる。

グレイスよ。我らは刹離、レジア、ともに他とは違う大きな力を持つてはいるが、流石に神や上位の妖怪を相手にするのは、それこそ神の助力を乞わねば不可能であるぞ

他の誰よりも冷静にものをいう刹羅。

つまり、刹羅はグレイスに、神の加護を。と、言外に頼んでいるのだ。

「わ～かっとうつてーせやからオレから頼むんやないか。戦の神として、お前らに力を貸そつ」

レジアが軽く目を見張る。

普通、神とは実に冷酷かつ残酷で、常に無慈悲な存在なのだ。しかし、今日の前にいる大神はどうだろ。

こんなにも容易く神の加護をやると言っているのだ。

それを言つてしまつ神にも驚いた。だが、驚いた理由はそれだけで

はない。

大神を前にしても、何故刹羅はあそこまで堂々としているのだろうか。

通常の守護獣や式ならば、大神の神通力を前にする」とすらできず
に、即消滅することは確実だ。

刹羅という姿は眞の姿か？否、偽りの姿か・・・。
もしも後者だとしても、眞の姿とはいつたい ？

レジアの思考は、グレイスの声に引き戻された。

「この勾玉を持つとき。それは、持ち主がほんまに危ない時に助け
てくれるで

多分」

グレイスは、蒼白い透き通った勾玉を前に出した。

刹離は一礼すると、勾玉を受け取った。

その一連の動作の横で、レジアは自分の中の何かが軽く切れる音が
したのをみとめた。

ヘレスが呆れたように半眼になり、レジアの襟首を銜えて半ば引き
ずるよう部屋から退散する。

「つこの・・・、グレイス！！あんたなつ多分とか多いんだよ！無
責任な！・・・いい加減にしろおおおおお 」

レジアの声が徐々に遠のいていった。

呆れた刹離はレジアの消えた扉に向かつて嘆息すると、グレイスに
向き直った。

「では、グレイス様、私どもは失礼させていただきます。あ、依頼
の報酬は後ほど受け取りに参りますので」

刹離はレジア達の後を追つて部屋を出た。

パタン

戸がゆっくりと閉じられた。

「はあ～～～・・・・」

刹離たちの気配が完全になくなつたのを確認し、グレイスは最大級のため息とともに椅子に深くもたれかかつた。

「はは・・・。刹離はなんの障害もなく仕事をこなせると思つたるなあ・・・」

椅子にもたれたまま上を向き、誰に言つてもなく呟く。

「さてつと・・・」

もう一度椅子に座りなおし、氣を入れなおした。

「我が同胞、Artemis アルテミス よ。我的声に応え」

グレイスが指を鳴らした。

すると、数秒の間をおいて、映像だけの姿がグレイスの前に現れた。それを見たグレイスは、ふつと懐かしそうな顔をしたが、その顔はすぐに緊迫感を帯びた表情に変わつた。

「久しぶりやなあ、アルテミス」

「ああ。久しいな、グレイスよ。何か用か?」

グレイス、と真の名で呼んでくる女性は、姿に合わない鋭い口調だった。

薄めの紺色の長髪を長い紐で右上に束ね、動きやすそうな格好に、両手には剣が握られ、背に大きな猟銃が担がれている。

整つた女性らしい顔立ちのアルテミスの周りには、何故か大きな狼が三匹うろついていた。

「実はな、狩りと用の神であるお前に頼みがあんねん」

「お前が他者に頼むか・・・。まあ、久方ぶりの同胞の頼みだ。聞いてやろう。言え」

アルテミスの答えに満足そうな笑みを見せ、グレイスは頷いた。

「助かるわあ）。あのは

刹離たち一行は、鮮やかな夕日の差す道を進んでいた。

グレイスのもとにいたとき、実は、彼の創り出した異界にあの屋敷の玄関が直接つながっていたのだ。

神の創り出した世界と人界は、時の流れが大幅に違うのだ。現に10分程度で毎が夕方に変わってしまう。

神々は皆長命だ。不死身というわけにはいかずとも、人間よりは遙かに長い年月を過ごしている。ダンピールであるレジアもまた、例外ではない。もちろん、刹羅・ヘレスとともに、人外のものは基本的に半不死身といつていい。

特に神の長寿の理由は、こういった異界に身を置くことが多いからだろう。

「なあ刹離、勾玉って一つしか貰つてないんでしょう？」

レジアが聞く。

「うむ。一つしかない」

手の中にある勾玉を再度確認して刹離が答えた。

「困ったなあ・・・」

どうかされましたか？

ため息交じりに言うレジアをヘレスが気遣う。

「ん？ あんな、敵と戦うことになつたとしてだ。もしも別行動がやむを得ない状況になつたらどうすんのかな～って思つてさ」

「確かにそうだな・・・」

刹離がレジアの言葉に頷く。

それだけではないぞ。我々はこれから帰路につくのだぞ？ 神界と人界に分かれるのだ。それこそ今決めねばならん

「・・・」

刹羅の正しい意見に対し、しばし沈黙が起こつた。

しかし、その沈黙を破ったのはレジアの気の抜けた声だった。

「ま、とりあえず俺の家でいつか〜」

「そうだな。お前が神界へ行くことは少々骨が折れる。我が人界に

残る方が得策であろう「う」

刹離とレジアは一人でさつさと合意し、レジアの家へ向けてとつと歩いて行ってしまった。

二人の数歩後ろから一匹がついていく。

あの二人、刹離は神であるが、一応女子であるぞ？我々がいるから安心しているのか・・・いや、でもお互いの性別くらいわかっているであろううし・・・そもそも我は刹離の親代わりなわけで・・・

ぶつぶつと愚痴を並べながら獸の顔ができる限りの渋面をつくる刹羅。

刹羅のそれを見たヘレスはなんだか楽しい気分になった。

そんな一同を見る一対の漆黒の瞳があった。

それは、嘲笑するかのように高々と鳴き、空高く飛び去った。

アア、＊＊＊力。ソウダナ。奴等ヲ樂シ

イパーティーへ招待シテ、一番手トシテ出迎エテヤレ

ハイ 任セテエ

楽しげな三つの声が暗闇の中に響き渡つた。

第5話 帰路（後書き）

一気に更新してみました。いやあ、読むの大変でしょうね、とか思つてみたり（——書くの大変でしたよ？ホントですよ？

まだまだぐろてすくなとこりはでませんよ（^ - ^）
これからまた刹離たけも・・・特にレジアが・・・

レ)俺が何だつて？

いえ、何も。

レ)なんか言つたでしょ・・・

いやいや・・・。そんなことより、リア友から質問来てる

よー！

レ)やつた。で、何？

『刹離を式にしたつてことは、可愛かつたつてことですか
？（1話参照）』だつて。

レ)そりやもう、死神じやなくて、天使つて感じ……可愛くて可愛
くて可愛くて・・・（以下略）

ゴシ

レ)いつてえ……何もグーで殴ることないじやん！！

離（離）貴様、少しばかりのことができんのか？！絶対馬鹿で軽い男でキ
ヤラ設定されるぞ？！

レ)えつ・・・・・

とにかく、頑張りますんでよろしく・・・・・

第6話 Party 開演（前書き）

読んでくれてる、そこの貴方！！！
感謝です（^▽^）

第6話 Party 開演

* * * * * 次の日の朝 * * * * *

「あ～あ！俺の式でも探せないのか・・・」

現在レジアたちは人通りの少ない一本道を歩いている。と言つても、この時間だ。人通りがある方が変だ。昨日靄の出現した場所で、少しでも敵の気配が残つてゐるうちにと、早朝から敵の悪意の軌跡を追つてゐるのである。

レジア達の足元で地面をうろつろして焦つてゐるのはレジアの式であり、最も妖氣や靈氣の類を察する能力に優れている『犬丸』である。

名前とのおり、ぱつと見はかわいらしい子犬のようだ。そう、ぱつと見は。

正面から犬丸を見ると、大抵の人は悲鳴を上げるか、卒倒するかのどちらかだろう。

レジアにとつては可愛いペットらしいが、犬丸には朱と藍の瞳が一対ある、正真正銘の妖だ。

「此奴が無理なのであれば、我にもできないだらう。神通力を追うならできるが・・・」

刹離が腕組みをして低く唸つた。

「……………ひっ
く・・・・」

突然、刹離の耳に突然すり泣く子供の声が聞こえた。
すかさず刹離が子供の方に駆け寄る。

ちなみに、今日も刹離はレジアによつて人間にも見えるよつになつてゐる。

「迷子か？」

子供は女の子だった。腰に着くぐらいの珍しい深緑の髪をした可憐らしい女の子に刹離は短文で子供に訪ねた。

女の子は一瞬キヨトンとした顔をしてから、泣き止むじたような瞳で刹離を見上げた。

「おねーちゃん、だあれ？」

「あ、怪しい者ではないぞ。・・・と、とりあえずだな、迷子であるつゝ、母を探すのだろう?」

「うん、おねーちゃん一緒に来てえ」

泣き疲れているのだろう、女の子の声はやけに間延びし、とても覇気が感じられなかつた。

女の子は刹離の服の裾をぎゅっと握り、刹離を見つめた。

「しようがない、行くか~」

数歩下がつて事の成り行きを見ていたレジアが刹離のそばへ来た。刹羅とヘレスは、女の子に神通力が当たつてしまつてはいけないのをやや離れて見ている。

「道に心当たりはあるか?」

「うん。おねーちゃん、多少こいつちこ・・・

女の子はさつき来た道を指差した。

「そうか、では、行くぞ」

「うん」

行くぞといいながらも、刹離はなぜか女の子に半ば引き戻されるように歩いていた。

* * * * *

「なあ、本当にこっちであつてるの？」

違和感を感じたレジアが女子に聞いた。

刹離たちは女子の声の言つまま歩き、いつのまにか見知らぬ場所まで来ていた。

疲れていたように見えていた女子は、今では元気に刹離の数歩前を歩いている。

「うん、絶対あつてるよ」

やけに自信にあふれた少女の言葉に刹離が疑問をもつた。

「わかつていいのか？」

「おかあさんにおしえてもらつたの」

女子は嬉しそうにスキップをしながら刹離に言ひつ。

「何を教えてもらつたのだ？」

「おそらをみながらかえりなさいって」

「なんで空を見ながらなんだい？」

刹離たちの会話にレジアが入ってきた。

「だつてね・・・」

突如、空の色が不気味な赤黒い色に染まり、周りの景色の明度を急速に落とした。

空気が重みを増し、絡みつくような粘り氣を帯びる。

「だつてねあのおそらはちのいろんなんだ。【あたしが一噛みするだけでたあくさんでるんだよ】

女子の声がいきなり若い女性の声に変わった。

赤黒い空はそのままに、いつの間にか刹離たちは無限に見える部屋のようなどころに立たされていた。

ただし、一角に人一人が通れるくらいの階段が見えるため、空間が無限でないことはすぐに分かつた。

それに続いて、不気味なほどに満面の笑みを浮かべる少女の、顔が、腕が、足が、腹が、シユルツと紐が解けたように崩れ、無数の蛇と

化した。

今はとても少女とは呼べないものの近くにいた刹離は飛び退り、レジアの横へつく。

「まつたく、こんな簡単に誘われてるんじゃ、あんまり楽しいパーティーは期待できそうにないわね」

奥から声の主らしき女性が歩いてきた。

「あんな朝早くから子供がいるわけないのにねえ ふふつ」

女性は、短いスカートと、袖のやけに長い服を身にまとい、とても長い、黒みがかつた緑の髪を幾本かに分けて束ねている。周りには、少女だったものがしゅるしゅると踊るように群がっている。

「ようこそ、ハデス様の創った異世界へ まあパーティーを始めましょう」

女性は先ほどよつむわらひに楽しげに、ひびく優しく言った。

第6話 Party 開演（後書き）

さて、ぱあていが開演したりやいましたよ。

これが白い色で、朱紅の感じにならぬか（

この小説の作者は、感想・評価等いただけると、

びます。

第7話 Party 2

クツクツクツ・・・。ハハハハハツ！――――！

刹羅の嘲笑が響いた。

ヘレスも同様に小さく笑っている。

余談だが、ヘレスはこの時初めて人間の『肩』という部分を欲しいと思った。

もし自分にあれば、震わせて笑つてみせるものを。

女怪ゴルゴンの分際で、我等に刃向うなど、格の違いを知れ怖ろしいまで冷え冷えとした視線を女怪に向ける刹羅。

「アラ、舐めないでよ？今はゴルゴン三姉妹は融合してるし、なんてつたつて今のアタシにはアレスとハーデス様の御加護があるんだから

ら」

〔冥府の王、ハーデスだと？！〕

ハーデスの名を聞いていなかつたレジア達は多少驚いた。
だが、全員動いた様子はない。

しゅるつ

・・・

女怪の周りに群がる蛇がアレスとハーデスの名を聞いて、喜ぶように一層大きくなり絡まつていて。

蛇を司る女怪・・・貴女は、メドウーサ・・・ですね？

女怪は、ヘレスの言葉に気付き、蛇を腕に絡ませながらまた楽しそうに言つ。

「今頃気づいたの？結構有名なのになあ・・・。ま、いいや

これから死ぬ奴等に名乗る義理もないし」

まとわりつく空気がメドウーサの蛇のように絡み合い、メドウーサの妖気が僅かに上がつたことを知らせた。

メドウーサの周囲に群がる蛇がヘレスを真っ直ぐ見つめでは、時折二股の舌をちらつかせ、威嚇の声を発している。

その度に耳を通して鳥肌が立つような妖気が這い上がつてくる。

刹離も、僅かに気圧された。

フツ・・・。面白い。我が相手をしてやる。刹離たちは先に行くがいい

刹羅はメドウーサを鋭く睨み据えたまま顎で奥に見える階段をさして言つた。

その表情は、余裕とともに、楽しんでいるように見える。では、私も化け物同士、殺り合つします。私が先に軽く手合せでもさせてもらいましょうか

「ふふふ、喜んで」

ヘレスの問いにメドウーサは笑顔で答え、そして異常なほどに口端を吊り上げ、歌うように言つた。

「さあ、殺りうか

行け！！！

刹羅とメドウーサの言葉が重なつた。

と同時に、メドウーサから妖氣で形成された蛇が放たれる。蛇は大きく顎門を開き、奥へと走る刹離とレジアに向かつていく。

斬ツ

突如蛇の胴体にぱつくじと傷が開き、蛇は蛇体を大きくならせ、苦しそうにもがいた。

私と手合せ・・・でしたよね？

ヘレスがメドウーサを射抜くように睨み据える。

「・・・ふふ 上等」

メドウーサは笑いながら右手をヘレスへと向けた。

その右手から無数の妖氣の蛇が放たれる。

ヘレスはそれらを龍の神力で粉碎し、その力をそのまま勢いでメドウーサへとぶつける。

メドウーサは神力を蛇で防いだが僅かに頬に傷を作つた。

「チツ・・・」

メドウーサは一度舌打ちすると、妖氣ではなく、本物の蛇を召喚し、放つた。

蛇たちは、地面を滑るように加速しながらヘレスへと近づく。

ヘレスは神力を蛇に集中させて払い退けた。

が、一匹の蛇の姿が瞬時にメドウーサの姿へと変化した。

！？

ヘレスは咄嗟に身を守りうと鳳凰の翼を自分とメドウーサの間に滑り込ませる。

しかし、メドウーサは攻撃を防御されたにもかかわらず、にやりと笑つて翼に噛みついた。

バサツ

ヘレスは反射的に翼を大きくはためかせてメドウーサを振り払った。メドウーサは振り払われた衝撃で地面を滑り、僅かに体勢を崩す。すかさずヘレスが間合いを一気に詰め、飛退こうとするメドウーサの全身を巻き上げ、締め付けた。

貴女は何故アレス様たちの味方に？

ヘレスがメドウーサの身体を徐々に絞め上げながら言つた。その間もメドウーサはずつと笑つている。

「つまらない質問ね 面白そだからに決まつてゐるでしょ 」

そう言うメドウーサの口から、女怪と言えど、その容姿とは明らかに不釣り合いな二股の細い舌がちらちらと覗いた。

！！

ヘレスが上空へ逃れようとメドウーサを締め付ける力を一瞬弱めた。

「そう、それは分身よん 」

ヘレスの胴の内にあるメドウーサは、先刻の少女のように瞬く間にしゅるっと蛇になつた。

蛇はそれにヘレスの胴に巻きつき、一噛み、一噛みと深く喰ら

いい
た。

第7話 Party 2（後書き）

更新が遅くて申し訳ないです・・・。
読んでくださっている方、どうか気長に更新されるのを待つてやつ
てください。――――――

登場人物紹介

名前：メドウーサ

性別：女
瞳：濁った金の蛇目

髪：黒みがかつた緑の長髪
服装：短いスカート、裾の長い服

する

身長：162センチ

体重：52キログラム

足：24センチ

武器：蛇、召喚術、

変化、等々・・・

特徴：歌うような喋り方をする。蛇は彼女の友達であり、家族らしい。

蛇に変化する白髪の長髪は、毎日手入れを欠かさない。

一言：ふふつ アタシにもやっと自己紹介の場が・・・

ほおら、蛇ちゃん達「ごあいさつしなさい？」て、何にも
話せないんだけどね 爆

第8話 Part 1序章（前書き）

体調不良や、なんやかんやで更新が遅れてしましました(・_・;) 読んでくださっている方へ(こぬかざわかは怪しこトロ)申し訳ありません!!

頑張つて早く更新できるようひた致します^__^

ポタッ

ヘレスの身体には、鮮やかな朱色が幾筋かはしつていた。

・・・私としたことが、女怪」ときに先手を打たれるとほ・・・

「あはは だから甘く見ないでつてば」

悔しそうに顔を歪めるヘレスを見て、メドウーサが嘲笑するよう

笑つた。

蛇の毒ですか・・・？

自らの胸の所々にある小さな傷口から流れる血に、異質な色が混ざつ

つていてのを見て、ヘレスが問う。

「そう アタシの毒は、即効性が自慢よ」

メドウーサが嬉しそうに笑いながら自慢げに言つたが、ヘレスは苦笑

いのよろんなものを浮かべて流した。

刹羅さん、代わつてもらえます？そろそろ

「あり？選手交代？いいわよ 誰でも負ける気はしないもの

ヘレスが後退し、刹羅がメドウーサと向き合つ。

刹羅は自信に満ち溢れた顔のメドウーサを一瞥し、フツと口元を歪めた。

いいだらう。此の龍鳳族の不意をつけるだけの力量があるのなら、
我も些か本気を出すか

刹羅がふわりと飛翔し、メドウーサをしつかりと見据えた。

メドウーサは刹羅の言葉に不愉快そうに反応した。

「ちよつと、そこちつちつやいの。あなた、そんな軟弱そつなくせして、でかい口叩きすぎよ？」

あからさまに馬鹿にしたような口調のメドウーサに、刹羅は怒った

様子もなく、メドウーサを呆れたような眼で見た。

刹羅は軽く嘆息し、獸の顔をうまく動かし、人間の『馬つ鹿じゃねエの?』といった時のような表情をした。

そうか。神の御加護を受けているにもかかわらず、貴様には我的姿が小さく見えるか。まあいい。どれ、眞の姿を見せてやろう。刹那、刹羅から光とも闇ともいえぬ色を混ぜた神通力が爆発し、メドウーサとヘレスの視覚を支配した。

神通力によつて爆風が巻き起こり、荒れ狂う水のように吹き抜けた。

「なつ・・・あなたは　？」

ようやく目を開けたメドウーサは、目の前にある巨大な影に驚愕の色を隠せなかつた。

「ハデス様の狗が何故ここに?！」

ふさふさの濃紺の毛に覆われたたくましい体躯に、巨大な四肢。その先についている爪は黒曜石のように鋭く光つてゐる。

頭は、三つ。大きな口から覗くのは、鋭い牙。血生臭い吐息が獰特の早い呼吸とともに吐き出される。金色に煌めく三対の瞳は、しつかりと獲物を捉えていた。

冥府の番犬ケルベロス

メドウーサは、突然の巨大な神通力に氣圧されたが、すぐに体勢を立て直し、ケルベロスをしつかりと見据えた。

「ハデス様の忠犬であるあなたが、主人に逆らうの?」

平静を装つて必死に問うた。

生憎と、今、我是刹離の忠犬でな

刹羅は皮肉交じりに言った。

ひやつほおおう!!!!久々の外だあツ!!!!あああツ!!!!さつ

そく殺したいのはつけん!!!!

刹羅とそつくりな顔をした右の頭、違つ部分は左頬の傷だけの頭が言つた。

破滅の頭、騒ぐなよ。殺すだけだ。骨まで碎こうとか考えるなよ
これまた、刹羅と同じ顔の左の頭、違う部分は右頬の傷だけの頭が
言った。

フンッ。理性の頭は一々五月蠅えな・・・。わかつたよ！殺すだ
けにしてやるよーーー！

「ちゅうど、何なのよ！……まあ、さ」の龍鳳族はアタシの毒で動けないんだし

性でながらもさすがにそこには

ふわつ

優しく、
冷たい風が唐突に吹いた。

誰が動けないのでですか？

風の吹いた方向に身を翻したメドウーサは今度こそ壁に当たった。目の前にいるのは、毒で仕留めたはずの龍鳳族。

「お前つ・・・アタシの毒で、なんであつ?」

動搖を通り越して、拳動不審になりかけているメモが一冊

Vine where e about s 話明していかたですね 神は 龍鳳旗の中でも特別な「di
神の居場所』なんです

۹۷

な、なによそれ！！」

たが、私に当たるわけです。あ、毒は体内で浄化させていただきまし
1000年に一度優れた者を神の憑代とされるのですか。それ

ヘレスは数倍あるケルベロスの横に移動した。

御免なさい。貴女には一人もの神からの加護があるようなので、加減はナシです

おい。とつとと噛み碎きに行きてえんだけど？

破滅の頭がヘレスを促した。

ああ、すみません。では

メドウーサが驚愕のあまり顔色を蒼白に変えている中、ヘレスが叫んだ。

遍く龍神に謹誓し奉る。我が身を憑代に。その甚大なる力を
をお貸しください

di v i n e a d v e

n t 龍神降臨 ! !

直後、辺りを射抜くような神通力の塊がヘレスに降り注いだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9646d/>

NecessaryCorkscrew 必然的な螺旋階段

2010年10月11日19時36分発行